

原著論文

当院における泌尿器科領域内での 重複癌についての検討

黒川 真輔 寺内 文人 鈴木 一実
徳江 章彦

今回われわれは、当院における泌尿器科領域内での重複癌について検討した。過去5年間に当科で入院治療した尿路性器系重複癌33例を対象として検討した。重複癌33例は、泌尿器科領域内ではすべて二重癌であった。重複癌33例の内訳は、腎細胞癌を含むもの6例、腎盂尿管癌を含むもの4例、膀胱癌を含むもの26例、前立腺癌を含むもの29例、精巣腫瘍を含むもの1例であり、重複癌症例の組み合わせは膀胱癌と前立腺癌の重複が24例と最も多かった。前立腺癌29例中9例は偶発癌であった。2つの癌の発生間隔については、33例中同時性が24例、異時性が9例であった。前立腺癌の増加に伴い重複癌における前立腺癌の割合がさらに増加することが予想される。

(キーワード：重複癌，臨床統計)

I はじめに

高齢化社会を迎え、また悪性腫瘍における診断技術の進歩や治療技術の向上などにより、最近重複癌の頻度は増加傾向にあり、泌尿器科領域内に限った場合でも重複癌を経験することは決して稀ではない。今回われわれは、過去5年間の当院における泌尿器科領域内での重複癌について検討を行った。

II 対象と方法

過去5年間に当科で入院治療した尿路性器系重複癌33例を対象とした。おもに診療録を利用して年齢、既往歴、家族歴、診断方法、病理所見、予後などについて検討した。重複癌として発生する2つの癌の発生間隔については、平田ら¹⁾の基準に従い1年未満を同時性、1年以上を異時性とした。

III 結果 (表1)

1. 発生数、発生臓器の組み合わせ (図1)

33例は、泌尿器科領域内ではすべて2重癌であった。その内訳は、腎細胞癌を含むもの6例、腎盂尿管癌を含むもの4例、膀胱癌を含むもの

26例、前立腺癌を含むもの29例、精巣腫瘍を含むもの1例であった。前立腺癌29例中、9例は偶発癌であった。組み合わせは、膀胱癌と前立腺癌の重複が24例と最も多く、次いで腎細胞癌と前立腺癌の3例、腎盂尿管癌と前立腺癌の2例、腎細胞癌と腎盂尿管癌の2例、腎細胞癌と膀胱癌の1例、膀胱癌と精巣腫瘍の1例であった。

2. 性別、年齢

性別は、男性32例、女性1例であった。発生年齢は、同時性の場合52~84歳(平均69.0歳)、異時性の場合、第1癌の診断年齢は55~75歳(平均63.1歳)であった。

3. 発生間隔

33例中同時発生例が24例、異時発生例が9例であった。異時発生例の場合、第一癌と第二癌の診断間隔は21.7~273.2カ月(平均99.3カ月)であった。

4. 既往歴、家族歴

重複癌33例の既往歴において、他領域にも悪性腫瘍の合併がみられた症例は4例あり、膀胱癌、前立腺癌、胃癌が2例、膀胱癌、前立腺癌、結腸癌が1例、膀胱癌、前立腺癌、胃癌、直腸

表1 当院における泌尿器科領域内重複癌症例

年齢	性	第一癌	組織型	第二癌	組織	診断間隔(月)	他領域の癌合併	予後	
1	65	男	膀胱癌	移行上皮癌	前立腺癌	腺癌	11.0	胃癌	癌あり生存
2	80	男	膀胱癌	移行上皮癌	前立腺癌	腺癌	0		癌死
3	62	男	膀胱癌	移行上皮癌	前立腺癌	腺癌	1.9		癌なし生存
4	66	男	膀胱癌	移行上皮癌	前立腺癌	腺癌	48.7		癌なし生存
5	74	男	膀胱癌	移行上皮癌	前立腺癌	腺癌	0.7		癌死
6	55	男	右腎癌	腎細胞癌	前立腺癌	腺癌	109.9		癌あり生存
7	70	男	膀胱癌	移行上皮癌	前立腺癌	腺癌	0.7		癌なし生存
8	75	男	右尿管癌	移行上皮癌	前立腺癌	腺癌	21.7		癌あり生存
9	65	男	膀胱癌	移行上皮癌	前立腺癌	腺癌	0.6	結腸癌	癌あり生存
10	72	男	前立腺癌	腺癌	左腎癌	腎細胞癌	2.2		癌あり生存
11	67	男	膀胱癌	移行上皮癌	前立腺癌	腺癌	1.3		癌なし生存
12	74	男	膀胱癌	移行上皮癌	前立腺癌	腺癌	2.5		癌なし生存
13	55	男	左腎癌	腎細胞癌	右腎盂癌	移行上皮癌	42.2		癌なし生存
14	73	男	膀胱癌	移行上皮癌	前立腺癌	腺癌	1.5		癌あり生存
15	55	男	膀胱癌	移行上皮癌	前立腺癌	腺癌	273.2		癌なし生存
16	69	女	左尿管癌	移行上皮癌	右腎癌	腎細胞癌	9.3		癌死
17	71	男	前立腺癌	腺癌	膀胱癌	移行上皮癌	1.7		癌あり生存
18	52	男	膀胱癌	移行上皮癌	右腎癌	腎細胞癌	1.6		癌なし生存
19	68	男	左腎盂癌	左腎盂癌	前立腺癌	腺癌	9.2		癌なし生存
20	67	男	前立腺癌	腺癌	膀胱癌	移行上皮癌	76.2	胃癌	癌なし生存
21	67	男	膀胱癌	移行上皮癌	前立腺癌	腺癌	2.6		癌なし生存
22	60	男	膀胱癌	移行上皮癌	前立腺癌	腺癌	0		癌なし生存
23	68	男	膀胱癌	移行上皮癌	前立腺癌	腺癌	1.6		癌なし生存
24	62	男	膀胱癌	移行上皮癌	前立腺癌	腺癌	110.2		癌あり生存
25	84	男	膀胱癌	移行上皮癌	前立腺癌	腺癌	0		癌あり生存
26	78	男	前立腺癌	腺癌	右腎癌	腎細胞癌	0.8		癌あり生存
27	53	男	膀胱癌	移行上皮癌	前立腺癌	腺癌	0		他因死
28	67	男	左精巣腫瘍	セミノーマ	膀胱癌	移行上皮癌	105.7		癌あり生存
29	70	男	膀胱癌	移行上皮癌	前立腺癌	腺癌	0		癌なし生存
30	78	男	膀胱癌	移行上皮癌	前立腺癌	腺癌	0		癌あり生存
31	67	男	膀胱癌	移行上皮癌	前立腺癌	腺癌	0		癌なし生存
32	66	男	膀胱癌	移行上皮癌	前立腺癌	腺癌	106.1	胃癌, 直腸癌	癌あり生存
33	70	男	前立腺癌	腺癌	膀胱癌	移行上皮癌	0.6		癌あり生存

癌の四重癌が1例であった。タバコとの関連においては、喫煙歴のあるもの21例、喫煙歴のないもの12例であった。また、家族歴で二親等以内の血縁者に悪性腫瘍の発生を認めるものは、33例中11例であった。

5. 予後

治療後の経過観察期間は平均33.1カ月であり、癌なし生存15例、癌あり生存14例、癌死3例、他因死1例であった。癌死3例の内訳は、

腎盂尿管癌1例、膀胱癌2例であった。癌死3例とも同時性であり、すべて第一癌による死亡であった。

IV 考察

重複癌は1889年に Billroth により最初に定義され、1932年に Warren and Gates²⁾が修正を加え、(1)各腫瘍が一定の悪性腫瘍像を呈すること、(2)互いに離れた部位に存在すること、(3)一

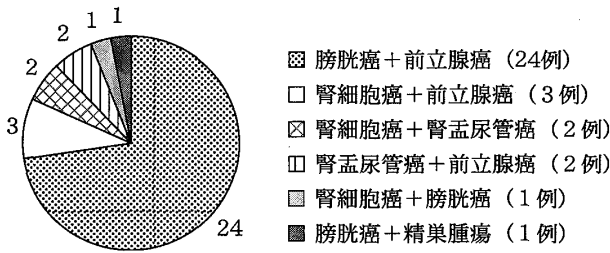


図1 当院における泌尿器科領域内での重複癌33例の内訳

方が他方の転移でないことと定義され、広く用いられている。今回われわれは、この定義に従い33例を集計した。腎盂尿管癌と膀胱癌はすべて移行上皮癌で組織像が同じであり、いずれも多中心性に発生する腫瘍であるため、腎盂尿管癌と膀胱癌の組み合わせは重複癌から除いた。

発生臓器の組み合わせでは、膀胱癌と前立腺癌の重複が24例と最も多く、33例中29例に前立腺癌が含まれていた。Chun³⁾は、膀胱癌患者のうち25%に前立腺癌が、また前立腺癌患者のうち3.8%に膀胱癌が合併していたと報告している。両者の合併の理由として、膀胱癌で根治的膀胱全摘除術検体に発見される前立腺偶発癌の存在、検尿や膀胱鏡検査など両者の発見に共通の検査を行う機会が一般より多いことなどが挙げられる。また、本邦における報告例には1991年伊藤ら⁴⁾の94例(当時までの本邦報告例を集計)、1998年紺谷ら⁵⁾の74例(伊藤らの報告以後の本邦報告例を集計)があるが、前立腺癌は近年急速に増加してきており、今回の検討において重複癌における前立腺癌の割合はこれまでの本邦報告例よりも高くなってきている(図2)。海外でも同様な指摘がされているが⁶⁾、本邦においても前立腺癌が関与する重複癌は今後ますます増加すると思われる。

癌の診断年齢に関しては、同時性の場合には平均69.0歳、異時性の場合には第一癌の診断が平均63.1歳、第二癌の診断が平均71.4歳と比較的高齢である。もともと泌尿器系に限らず悪性腫瘍は高齢者に多く発生するものであり、老化現象に伴う悪性腫瘍に対する免疫能の低下を反映するものとされ、悪性腫瘍発生における宿主側の1つの要因と考えられている。

第一癌と第二癌の診断間隔に関しては、異時性の場合平均99.3カ月であり、かなり長期に第

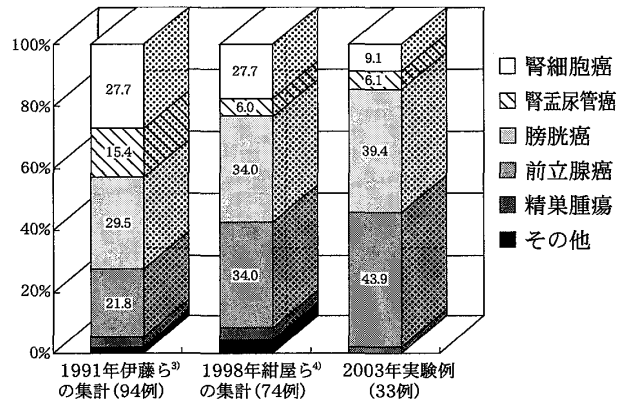


図2 重複癌の臓器別発生率(本邦報告例との比較)

一癌だけでなく他の癌の発生にも注意する必要があると思われる。また、異時性の占める割合は27.3%であり、今後平均寿命の延長、診断技術・治療法の進歩による癌患者生存率の増加などにより異時性重複癌が増加することが予想される。

発癌因子に関しては、喫煙者が約63.6%を占めるが、患者のほとんどが男性であることや年齢層などを考慮すると喫煙者に特に多いとはいえない。第一癌に対する放射線療法や化学療法が第二癌の発生に関与していると考えられるいわゆる誘発癌は、今回の検討では特に該当者はないと思われる。家族歴としては、二親等以内に悪性腫瘍の発生を認めるものは33例中11例であった。その悪性腫瘍の種類には特徴を認めなかった。

重複癌の予後に関しては、これまでは一般的に悲観的な報告が多いが、これは診断技術やfollow upの仕方にも関連し、発見時の病変の進展度を反映するものと思われる。自験例では生存症例も多く、集団検診の普及に伴い早期発見例の増加が見込まれることから今後予後は改善していく可能性がある。

V 結語

自治医科大学において過去5年間に入院治療した泌尿器科領域内での重複癌について臨床的検討を行った。33例の重複癌症例を認め、すべて二重癌であった。そのうち29例に前立腺癌が含まれていた。組み合わせは、膀胱癌と前立腺癌の重複が24例と最も多かった。前立腺癌の増

加に伴い重複癌における前立腺癌の割合が今後さらに増加することが予想される。

文 献

- 1) 平田弘昭, 伊藤慈秀, 妹尾巖 他: 原発性重複癌について—当院における重複癌27例の報告と文献的考察. *Medical Postgraduates* 13: 498-508, 1975.
- 2) Warren S and Gates O: Multiple primary malignant tumor: a survey of the literature and a statistical study. *Am. J. Cancer* 16: 1358-1414, 1932.
- 3) Chun TY: Coincidence of bladder and prostate cancer. *J Urol* 157: 65-67, 1997.
- 4) 伊藤尊一郎, 堀武, 岩瀬豊 他: 泌尿性器系重複癌(前立腺・腎盂)の1例. *西日泌尿* 53: 216-220, 1991.
- 5) 紺谷和彦, 水沢弘哉, 米山威久: 尿路性器重複癌の8例. *西日泌尿* 60: 98-100, 1998.
- 6) Liskow As, Neugut AI, Benson M et al.: Multiple primary neoplasms in association with prostate cancer in black and white patients. *Cancer* 59: 380-384, 1987.

Multiple primary cancers limited to the urological field

Shinsuke Kurokawa, Fumihito Terauchi, Kazumi Suzuki,
Akihiko Tokue

Abstract

We analyzed the clinical features of multiple primary cancers arising from the urogenital organs. Of patients who were treated at our hospital for the past 5 years, 33 patients had multiple genitourinary cancers, and all of them were double cancers limited to the urological field. The double cancers included renal cell carcinoma in 6 cases, renal pelvic-ureteral cancer in 4 cases, bladder cancer in 26 cases, prostate cancer in 29 cases, and testicular tumor in 1 case. The highest rate of double cancer was bladder cancer and prostate cancer in 24 cases, while incidental prostate cancer was found in 9 cases. 24 cases had synchronous tumors, and 9 cases had metachronous prostate cancer. The occurrence of prostate cancer has recently increased; therefore, the double cancers including prostate cancer will increase more and more in the future.

Key words: Multiple primary cancer, Clinical analysis